「僕達が守る平和」

阪南市立貝掛中学校三年
林　直樹

「あんたたちが、平和な世の中を守り続けていかなあかんよ。」七十七才になる祖母が、よく言う言葉です。祖母は、第二次世界大戦終戦の時、十二才。満州での敗戦でした。侵略した国であっても、祖母の父や母は、中国人の人達とも仲が良く、日本が負け、引き揚げる時も、あたたかい言葉で送り出してもらったそうです。けれど、持てる物を持ち、「ソ連が攻めてくる前に。」「日本へ無事帰れないかも。」と、うわさやデマが飛びかう中、命からがらの引きあげだったそうです。満州で亡くなった弟や妹の遺骨を首から下げ、ぎゅうぎゅうづめ、赤ちゃんも泣くことが許されないような列車での移動。船に乗りかえ、何とか博多へ着いたのです。三才の妹は、「ああ、竹輪一本、丸ごと食べたいなあ。」が、口ぐせだったそうで、食べざかりの子どもが、

いつも空腹を我慢しているのはつらかっただろうと思います。岸和田の親せきは、幸い空襲にあわず、頼ってやってきましたが、電車で三十分程の堺の中心部は大空襲で、一夜にして多くの死者を出したそうです。「そんな中に、子どももたくさんいたんやで。戦争は、おとながしかけるけれど一番犠牲になるのは、弱い人、特に子どもたちにや。」と祖母は言います。そんな祖母からもらった一冊の本があります。「子どもたちの昭和史」という写真集です。ぼくは、歴史が好きですが、祖母の話を聞いて思うのは、日本の歴史で、昭和は、一番揺れ動き、一番変化した時代ではないかということです。昭和六年の満州事変から十五年もの長い戦争の時代。人間が、人間らしく生きる事が難しい時代。今までは、写真集を見ても、「ああ、こんな時代もあったんだ。今でよかった。」と他人事のように思っていましたが、歴史や公民の勉強をしたり、平和学習をする中で、一枚一枚の写真の見方も変わ

りました。戦争につき進む中、戦火の中、終戦の中、一番弱い立場である子どもたちは、どう生きてきたのか、一枚一枚の写真、一人一人の表情がぼくの心に平和の大切さを語りかけてくれました。今、ぼくたちは、自由に好きな事を好きなだけ学ぶことができます。けれど戦時下では子どもといえども貴重な労働力でした。おとなの男性の大半がかり出され、中学生、小学生までもが、戦争協力の勤労動員にかり出され、都市では、防空壕を掘ったり、工場で鉄砲の弾を作ったり、飛行機の組み立てをしたりしていました。劣悪な労働条件、軍需工場などへの爆撃によって、多くの子どもが犠牲になりました。また、学校生活全体が軍隊式になり、戦争で勇敢に戦い、国のために死ぬ事が立派だと教えられたそうです。ぼくたち人間は、誰でもたくさんの可能性を持って生まれてきます。自分の夢や希望にむかって生きています。ぼくにもぼくの夢があります。けれど、戦争は学ぶ機会

を奪い、勝つことにむかって、子どもたちを未来の兵隊として育てているような気がします。祖母に聞くと、小さな男の子のほとんどが「大きくなったら兵隊さんになりたい。」と言っていたそうです。又、二十才の徴兵年齢に達しないでも、志願して少年兵になった人も多く、志願年齢が十四才にまで引きさげられ、志願者が急増したそうです。十四才。ぼくの年と同じです。「人の命を奪い、自分も死ぬ戦争に志願するって、どうして？」今、平和な世の中で生きているぼくはそう思います。でも、その時代、その世の中で、そう思えたでしょうか。軍隊に入ることを誇りとしている世の中で。教育も文化も考えも戦争一色の世の中で。それに、志願しなくても戦争は、子どもにも容赦ありません。空襲、沖縄の地上戦、親の戦死、生き別れ、飢餓…。

今、ぼくたちは、平和の中、学校でも家庭でも、独立した一人の人間として、育てられています。それが、当たり前で、祖母が言う

「平和な世の中を守り続けていかなければ

…。」という意識がありません。けれど、この平和がくるまでに、多くの人、特に子どもも犠牲になっていることを知らなければいけないし、一人一人の大切さを考えなければいけないと思います。今も世界のあちこちで、戦争や紛争が起こっています。アフリカの少年兵の話を聞いたこともあります。ぼくはその場にはいないけれど、又、あの時代にはいないけれど、色々な事を知り、「何故？」

「それは、おかしいんじゃないか？」「平和のために、自分が今できることは何なのか？」を考えたり、言葉にしたり、行動する事はできます。そんな時代を生きているぼくたちだから，戦争の時代を生きてきた祖母が言うようにぼくたちが平和を守り続けていかなければいけないと思います。